

子規短歌におけるユーモア

黒沢 勉

目次

- 一 はじめに
- 二 病床の生活と短歌
- 三 天田愚庵との交流
- 四 童心と諷刺
- 五 はがき歌

一 はじめに

人間を生物学的・身体的な立場からのみ捉えるのではなく、「心」からも考え、その「心」が身体に影響を及ぼすという事実については、「病いは気から」などという言葉が示すように古くからの知恵として言われていたことであつた。だが、近代の医療はその知恵を無視し、医学的唯物論に傾いてきた。そこでは病者自身の内面は無視されがちであつた。科学は、客観化、対象化、そして測定しうるような資料化を基本としており、これに対して「心」というのは主観的な感受性にかかわるものだからである。しかし、病者が病むのは、身体だけでなく「心」も病み、不安や悩みをもつて病院を訪れるのである。医師が自らの病院を訪れる患者の身体にのみ関心を払い、その「心」を無視するなら治療自体も効果をあげないだろう。むしろ、多くの心ある医師は病者を慰め励まし、力づけ病める者の心にも充分注意を払いつつ医療にあたってきた。しかし、医師の研究対象としての「病氣」でなく（私は医師による研究対象としてのそれを「病氣」と呼び、その「病氣」に端を発し、病める者がかかえる多義的な困難を「病い」と呼んでいる。「病氣」は医科学的な「病名」によって一括され、それぞれの原因や治療法が探究される。「病い」はそれに対して、一般化できない、一人一人のもつ多様な困難——不安や恐怖、痛みや苦しみ、悩みなどをさす。同じ「病氣」にかかりながらも「病い」には「病氣」で一括できない多様性がある。それは、一人一人異なるという意味で多様であると同時に、又一人一人が多様な問題をかかえるという意味でもある）病める者自身の葛藤としてみる時、そこから学ぶべき多くの知恵があり、それは私達の生命観を豊かにすると同時に、新しい医療のあり方として提言されるべき数々の問題があるのではないかという予感をもっている。そのためには、病者の体験

や又それを書いたものが貴重な資料となる。

「笑いと治療力」(ノーマン・カズンズ著、松田銑訳 岩波書店) という本は、その中で注目すべき一冊と言ってよい。カズンズは重症の膠原病で、全快の見込みは五百に一つしかない、と医師に宣告された。その時、これ迄、病氣にかかった時、いつも医者まかせだったと反省、その「五百人中の一人」になるためには「受身の傍観者に甘んじてはだめだ」と考えたという。ここにカズンズの闘病体験の出発点があった。多くの病氣は医師の与える薬や又手術によって治り、健康な人間として再び活動できるようになる。その場合、病者自身の、こうした主体性はさほど問題にならないようにみえる。しかし、その病氣が何か、病院に行くかどうか、あるいはどの病院を選ぶか、仕事を休むか、休まないか、などといった選択は常に病者の主体性においてなされる。又、病院に行き、その病院の患者となつてからも、医師との交流の中で、その都度、患者なりの判断、選択をしながら治療を受けるわけで、完全な「医者まかせ」ということではない。しかし、多くの場合、患者はいわば病氣の「素人」として、医師の助言や治療方針に素直に協力するだろう。大部分の病氣はそれによって治るであろうが、困難な重い病氣に冒された時が、一番問題である。医師も簡単には口に出さないまでも、その経験を通して、この患者は助からないだろうと判断し、延命を見放さざるをえない時がある。むしろ最期の最期まで懸命の努力を続けるであろうが、結局のところ、ついには、人は死なざるをえない。(現在、延命至上主義的な治療行為自体が倫理的な観点から問題になっている。高度に発達した医療技術は、あらためて人間らしい生き方、死に方とは何かという問題を提示していると言えよう)

いつかは死ぬ、これほど自明な真実はない。だからこそ、死自体を見つめる必要があるのであって、死から目をそらし、生のことばかり考えるのは、ほころびをつくらうようなものである。健康維持のための数々の本が出され

(その中にはしばしばベストセラーになるものも多い)食事や運動をはじめ様々な方法、工夫がブームのように次々に生み出され、それが又一つの「商売」となっている。私が常々疑問に思っているのは、それが多くの場合、安手の安直なハウツーものにすぎないからである。又、病気を恐れ、嫌い、病気になると何もできない、健康こそすべてにまさる宝だというような考えが、無意識的にも強力な力をもって現代人を支配しているように思われるからである。健康は健康として確かに尊いものであり、願わしいものではあるが、病者の生を思い、自ら病むことにも備え、死を考え、死から生を考え、神、仏を思い、生命を思う―そこに人間の精神の深みがあり、文化があるはずである。

「笑いと治癒力」は、文学書でも、宗教書でもなく、邦訳の題名から考えると、一種のまじないなハウツーものの印象も受ける。しかし原題の「Anatomy of an Illness Perceived by the Patient」(患者からみた病気の解剖)という言葉が示すように、患者の側に立って、現代の医療、病院のあり方を鋭く批判すると共に何よりも、病いをどう克服するか、病いをどう生きるかという、病者の主体性が強調され、「生活の質」の重要性が説かれている。

わけでも注目すべきは、自らの膠原病から奇跡的に回復した経験を通して「生への意欲というものは単に理論的抽象ではなくて、治療的な特徴を持つ生理的実在だ」と結論づけていることである。病気が悪化の一途を辿っており、治療の手はないと専門家に宣告されたカズンズは「その宣告に服さなかったら、いわゆる不治の病気につきものの、恐怖と落胆と狼狽のサイクルにおちいらなかった」という。そして具体的には、ビタミンCと笑いによって回復したのだという。ビタミンCはここではおくとして、笑いということについて紹介してみたい。

それによると、カズンズはハンス・セリエが「生命のストレス」で説くように、不快なネガティブな情緒が人体の化学作用に悪い影響を与えるというのなら、逆に又、積極的な情緒―愛や希望や信仰や笑いや信頼や生への意欲

が積極的な化学反応を起こす治療的な価値をもつのではないか—そう考えたという。そして健康のためにはむしろ良くないと考えて、病院を出てホテルへ引越し、そこでつとめてテレビのお笑い番組を見たという。その結果、「効果はてき面だった。ありがたいことに十分間腹をかかえて笑うと、少なくとも二時間は痛みを感じずに眠れるという効き目があった。笑いの鎮痛効果が薄らいでくると、わたしたちはまた映写機のスイッチを入れたが、それでもう一度しばらく痛みを感じずにいられることが多かった」—容易には信じられないことだが、カズンズはそう書いている。

「笑いと治癒力」は、ここ数年、子規の生涯とその文学活動を調べてきた私に、医療の側から文学作品や文学者を考える一視点を提供しているように思われた。子規の文学の一面は、というよりその特質は「病者の文学」であり、その病いを積極的に、主体的に生きようとする姿勢の中から生み出されたものだからである。わけでも脊椎カリエスによる苦しみをなめ通した最後の七年（二十八才から三十四才）は、私達に、すぐれた「生活の質」を示している一つのモデルケースとも思われるからである。短命であることは自動的に「生活の質」を高めることにはならないし—第一、私達は普通、自らが短命でこの人生を終えるのか、それとも長く生きるのか知ることができない。それでも、自分の人生を期待をこめて長く見積もって、のん気に日を送っている—又、病者であることが、自ずと「生活の質」の向上を約束するというものでは決していない。「生活の質」というのは、何よりも一人一人の意識にかかわる問題であり、その一人一人を取り巻く周辺の人々にもかかわる問題である。私達はややもすれば個人の意識、生き方の工夫としてののみ「生活の質」を考えがちだが、人間の生活は常に共同体的なものであって、家族や近隣社会、趣味や仕事の仲間—それらの支えなしに「生活の質」の向上もありえない。又、注意すべきは、「支え」と言えば、一方が支え、他方が—病者が支えられるという風に一面的に考えやすいが、むしろ互いに支えあっている

る面もあることである。病者と言えども、ただ支えられているのではなく、違った形で人々を支えてもいるし、支えることができるのである。

子規の晩年こそ全くその典型であった。病気になつたら何もできなくなるという「迷信」を、これほどぶち破つてくれる人も珍しい。子規在世当時、健康を自負する人がかえって、この寝たきりの大病人に逆に力づけられ励まされ、笑わされたという。それは現在、子規を読む読者においても同じであつて、子規の作品は深い慰めや、励まし、笑いにみちているのである。私はその点について、特に「子規短歌におけるユーモア」という視点から考えてみたい。

それは子規における「生活の質」の問題を、その短歌を通して眺めるといふことでもある。子規の短歌は、子規没後、自筆稿本「竹の里歌」によつてほぼその全貌を知ることができる。その中から特にユーモアということをしるくいあげて、これを眺めていこうとするのは、そのような視点に立つ研究が少ないからというのみでなく、私自身、そのユーモアに強く魅かれるものがあるからであり、しかもそのユーモアが病苦の生活の中から生み出されたユーモアだ、という点に深い関心をもつからでもある。

まず、これ迄「竹の里歌」について、どんな評価がされていたのか紹介してみる。

○「在来の和歌的、俗臭を脱して俳句によつて開いた写生の眼を駆使し万葉集の緊密な調べを接受して、独自の歌風をはじめ、三四年以後病者の透徹した境地に進んでいる」(「新潮日本文学小辞典」山本健吉の解説による)

○「病床生活の実感を率直に詠んだ作品に万葉調を生かし、そういう写実的な行き方をすすめて独自の歌風を形成した。…子規自筆の「竹乃里歌」は作歌活動の最高潮を呈した明治三三年までにとどまり、その後病勢の悪化につれて歌の数は減少したが、かえって歌風の純化がみられる…万葉の用語や句法を駆使し、目に映るまで、心の赴く

ままを淡々と歌って渾然たる感がある。こういう自在無碍の心境において子規は死を迎えたのである」(『日本文学鑑賞辞典』東京堂。北住敏夫の解説による)

これらの評価は、文学史的な立場、あるいは文芸的な立場からみて、それぞれの得た評といえるだろう。しかし、短歌を鑑賞する時に―いや、短歌に限らずすべての文芸作品についてもいえることだろうが―文学史家、文芸研究家の鑑識眼がすべてなわけではない。作品はすべての人に向着いて開かれており、未熟な読者、素人の読書にとつても、一読者として平等なものなはずである。私のように「病者の文学」という問題意識に立って、作品を選択し、あるいは今迄読まれている作品についても考え直してみるということも、一つの視点として作品解釈を豊かにする材料にはなろう。

子規の短歌のほぼすべてを眺めてみて私は、子規を代表する短歌はそれとして面白いにしても、それ以外にもずいぶん面白い歌があることに気づいた。又、こんなことも試みているのかといった驚きを感じることもしばしばだった。何よりも愉快的な歌、ユーモラスな歌が多いことに気づかされた。啄木や与謝野晶子、北原白秋、斎藤茂吉、それら近代を代表する歌人にな子規短歌の特色というべきものではないか。しかも、そのユーモアは、言語に絶する病苦の生活の中から生み出されている。カリエスの末期的な苦しみの中にあつて、子規は暗い絶望的な心境に陥らずにどこまでも明るく、さわやかで単純である。苦しんでいる人の歌が、それを読む人を明るく楽しくさせるのである。一体、それはどこから生まれてきたのだろうか。それが一つの問題である。又、カズンズがいうように、笑いに治癒力があるとすればなら子規にあつても自らの生み出したユーモラスな短歌は、子規自身を支える、癒しの力となったのであろうか。それが又一つの問題である。そのような問題意識をもって、以下、子規短歌を眺めていきたい。

二 病床の生活と短歌

①、定めなき世は塞翁が馬なれや我病ひありて歌学びえつ

②、神の我に歌をよめとぞのたまひし病ひに死なじ歌に死ぬとも

明治二十二年、結核に冒されて咯血した子規は、それにちなんで自らの雅号を「子規」とした。病名を雅号とした点に、病いと闘いを通して自らの文学生活を生きようとする覚悟がこめられていた。以後、子規は、時に病床に臥すことはあるものの、比較的小康のうちに「日本」新聞記者として出社し、時に芭蕉を気取って国内を旅し、果ては遠く大連にまで従軍記者として赴く。しかし、自らの健康をかえりみぬ文学への野心と情熱、青年らしい覇気、客気は、結果として取返しのつかぬ病いの悪化を招く。即ち、肺結核から、さらにその進行した結核性脊髄炎―脊椎カリエスによる臥褥生活である。明治二十九年以降、子規は時として杖にすがって小庭を歩くとか、ごくまれに人力車に乗せられて外に出かけることはあったにせよ、一年三六五日、一日中病床に横たわったきりの、しかもしばしば襲ってくる激しい痛みに耐えなければならぬ悲惨な生活であった。

子規はそんな生活の中にあっても、①の歌にいうように、世の中は何が幸であり、不幸であるかわからない、病いのお陰で自分は歌を学ぶことができたのだと苦笑している。歌に限らず、子規にあつてはその短歌も随筆も病いを通して成熟していったと言える。文学への限りない野望に燃えていた子規にとって、その病いは必ずしも呪うべき、憎むべき対象ではなかった。それにしても痛み、苦しみはあるわけで、その中であつて病いのお陰だと言いつつ、切るところに負けず嫌いの子規の面目がある。②は、神が自分に歌を詠めとおっしゃって、この病いを与えたのだ、

だから短歌のために死ぬことはあつても、病いに倒れるのではない、自分の一生は短歌のためにあるのだ、という使命感、短歌に生きる決意を述べたものである。病いの深まりと文学に対する情熱は、子規にあって不思議なほどに重なっている。明治三十一年に作られた以上の二首は、その病いの中で文学に生きようとする子規の姿勢を示したものである。

こうした病いを生きる自らの姿勢、決意を述べた歌に対して、病いの症状そのものから発想された歌がある。たとえば同じ明治三十一年八月十二日発表「足たたば」の見出しをつけた次のような連作。

- ①、足たたば箱根の七湯七夜寝て水海みづうみの月に舟うけましを
- ②、足たたば不盡ふじの高嶺のいたたきをいかつちなして踏み鳴らさましを
- ③、足たたば二荒にっこうのおくの水海みづうみにひとり隠れて月を見ましを
- ④、足たたば北インヂヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを
- ⑤、足たたば蝦夷の栗原くぬ木原アイノが友と熊殺さましを
- ⑥、足たたば新高山にいたかやまの山もとにほり結びてバナナ植ゑましを
- ⑦、足たたば大和山城うちめぐり須磨すまの浦わに昼寝せましを
- ⑧、足たたば黄河の水をかち渉わたり華山はすの蓮の花剪きらましを

以上の歌はいずれも「足たたば…ましを」の型を踏まえた同工異曲の歌である。子規は現実には、立ち上がることもできない「仰臥」の生活、「ででむしのかしらもたげしにも似たり」と句に詠んだように、左手で己が体をささえて体を起こすことしかできない病床の生活にあった。旅行好きの子規は、旅行どころか自らの足で自由に立ち上がることさえできなかった。しかしそれを、「旅ができたなら」、「立てたなら」と悲しい願いとして詠んだら、

かえって淋しく、辛いことになる。とつくにあきらめてしまった足であり、治ることのない病いである。そこから居直って、大ぼらを吹く。そこにこれらの歌のもつユーモアがある。即ち①の歌では、もし足が立つなら箱根温泉の七つの湯に、七晩泊まって湖の月に船を浮かばせてみたいものだという。このあたりは、まじめなような歌いぶりだが、それにしても「七湯七夜寝て」には言葉の遊びがある。②は、もし足が立つなら富士の頂上を雷のようにどかどかと踏みならしたいと、まるで大きな鬼か何かのような大仰な言いぶりがおかしい。③は、もし足が立つなら日光の奥の湖に一人、隠れて月を見ようと隠者的な悠々自適の生活への憧れを述べている。④は、もし足が立つならエベレストの雪を食いたいものだ、と途方もない無邪気な空想にふけり、⑤も、もし足が立つなら蝦夷の栗やくぬ木の林を歩き、アイヌの友と熊殺しをしたいものだ、とこれ又、子供のような無邪気な夢を語る。⑥は、もし足が立つなら台湾の新高山の、そのふもとでバナナを植えたい、と食いしん坊だった子規らしい想像を楽しむ。⑦は、もし足が立つなら大和や山城をめぐり歩き、須磨で昼寝をしたいと風流な旅を空想したもの、⑧は、もし足が立つなら中国の黄河を徒歩で渡り、華山の蓮の花を切ろうと、「白髪三千丈」顔まけの誇張、夢である。

旅行どころか、立ち上がることさえままならぬ子規は、こうして日本国内はもちろん、中国、インドまで思いをばせ、空想の中で、世界中、どこへでもとび回っている。もちろんそれは、全くたわいない夢、冗談にすぎない。これらの歌は、立って自由に歩きたいという願望をかなわぬ願望として嘆くのは全く違った発想である。悲惨な現実、たわいもない空想にもとづく作歌によって忘れられている。歌作りはここでは慰めというよりも、むしろ積極的に楽しい遊びとなっている。人は悲惨な現実にあつても、なおこのように遊びうる、心のゆとりをもちうるのだということ、これらの歌は証明しているかのようである。

このような無邪気で楽しい空想でなく、己れの現実をそのまま直視するとどうなるのか。これらの歌の発表から

九日たつて、九月二十一日、子規は「日本」新聞に「われは」の八首を發表した。

- ①、ひむかしの京の丑寅杉茂る上野の陰に昼寝すわれは
- ②、吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは
- ③、富士を踏みて帰りし人の物語聞きつつ細き足さするわれは
- ④、昔せし童遊びをなつかしみこより花火に余念なしわれは
- ⑤、いにしへの故郷人のゑかきにし墨絵の竹に向ひ坐すわれは
- ⑥、人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵にこもりて蠅殺すわれは
- ⑦、果物の核を小庭に蒔き置きて花咲き実のる年を待つわれは
- ⑧、世の人は四国猿とぞ笑ふなる四国の猿の子孫ぞわれは

子規庵は（と言えば聞こえはいいが、それは貧しい病者、子規の借家である。それでも子規の意識の中で、これはまぎれもない古典文学の伝統に立つ詩人の庵であった）東京市下谷区根岸にあった。江戸が京都に対して「東の京」という意識をこめ「東京」という新時代を象徴するあらたな名を与えられたのは一八六八年（慶応四年）四月、この年九月八日「明治」と改元される。子規の感覚の中には、この新時代を生きる新しい人間としての希望と野心があつた。しかし、①の歌でいうようにその新しい時代、帝都、東京の東北に位置する上野の森の陰で進歩の世からとり残されたように、一人昼寝し、無為をかこっている。昼寝とは言え、決してのん気なものではなく、強いいられた病いの床である。子規はそこで②の歌でいうように、夜ともなれば吉原遊廓のにぎやかな太鼓の音を聞きながら、浮世の歡樂と離れ、一人黙々と俳句分類に取り組んでいる。俳句分類は古典俳句を季題別に分類して書き写していくという地味な作業で、子規がこの作業に着手したのは、二十二才の時に始まり、すでに十年近く取り組んで

きたものである。この俳句分類の作業は孤独で、無聊に苦しむことの多い子規にとって、まことにあつらえ向きの作業だった。古典俳句をひもとき、これを清書しているうちに、しらずしらず古典俳句に通じるようになる。書き写す作業は馬鹿にならなかつた。しかも、それは単に過去の研究ということではなく、当代の俳人達を指導していく時の力になつた。子規は「ホトトギス」の実質的な主宰者なのである。「俳句分類すわれは」というところに、一人その仕事に没頭し熱中している子規の孤独、忍耐ばかりでなく、指導者としての情熱的な研究の姿勢がある。

子規は弟子の俳人や歌人の来訪を喜び、それらの人々が何か面白い話、情報を提供してくれることを、この上ない楽しみとしていた。ある時、富士山に登つた人の体験談を面白く聞いた。そして富士に登るところか、立ち上がることもしできない、やせ細つた足をさすり、何か冗談でも言ったのかもしれない。あるいは己れの足をさすって深いため息をついたのかもしれない。③の歌には、自らの足をさすって、しみじみと衰えを感じる寂しさが素直に詠まれている。「足たたば不盡の高嶺のいたたきを……」のユーモラスとも見える無邪気な空想の裏に、こうした寂しい現実があつた。

④の歌は、幼かつた昔、元気だつた昔をなつかしみながら、熱心にこより花火をよつていているというが、何ごとかに熱中することで辛い現実を忘れささやかな幸福を味わう。⑤も同じように、墨絵に向かつて真剣に眺めている己の姿が詠まれている。目を外に向け、ひたすらに何ごとかに打ち込むことは病床のつれづれを生きる知恵であつたばかりでなく、こうして作歌の材料ともなつた。⑥は、直接には③につながるもので、箱根や伊香保に行った人の話を聞き、外に出歩くこともできず、終日庵にこもつて蠅を殺している己れの姿―わびしい現実が描かれている。

⑦は、果物の種を蒔いて、やがて花が咲き、それが実るのを楽しみに待つ心が歌われている。草花や果物への愛着は病いの深まりの中で一層つよつていったようである。⑧は、④のような幼少の思い出に触発されて、改めて自ら

の出目を四国の人間として捉えたもので、今、この花の「東京」に生きている自分は、「四国の山猿」だと軽い自嘲をまじえつつも、自負をもって、己れを語ったものである。

「われは」の連作は、以上のように子規の生活や心境を忠実に写したもので、しみじみとした実感がにじんできている。しかし、子規は「足たたば」の歌のようにそのようなまじめな読みぶりを自ら否定してより大きな遊びを楽しもうとした。「われは」の現実感覚から飛翔し、もし自分が空かける鳥だったならと詠んだ一連の作もその一例である。これは山上億良の「世の中を憂しとやさしと思うへども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」（Ⅱ世の中を辛いことだ、たえがたいことだと思っても飛び立つことはできない。鳥ではないのだから）に触発されるところもあつたであろうが、億良は「鳥でないから」と、現実には縛りつけられている己れを嘆いたのに対し、子規は「もし鳥だったら」とのびやかな空想の翼を広げていく。即ち明治三十三年の、「鳥にありせば」と詞書された十首

- ①、人にして鳥にありせば駿河路や三保の磯辺の松に巣くはな
- ②、人にして鳥にありせば富士のねの清き月夜にみ空かけらな
- ③、人にして鳥にありせば毘わなかけし人のたくみを鳥に語らな
- ④、人にして鳥にありせば久方や天つをとめにたくひて居らな
- ⑤、人にして鳥にありせば海原やかもめのむれにまじりてあらな
- ⑥、人にして鳥にありせば木曾山こずえや森の梢こずえに妹を隠さな
- ⑦、人にして鳥にありせば妹と二人空舞ひかけり舞ひかけりせな
- ⑧、人にして鳥にありせば妹と二人羽まきあひて木の枝に寝な
- ⑨、人にして鳥にありせば妹か子に羽うちおほひ霜を防がな

⑩、人にして鳥にありせばみ空なる神のお前にうたへ申さな

上の句にいずれも「人にして鳥にありせば」を置き、下にのびやかな童心にも近い空想を広げている。上の句は直訳的に言えば「自分は」人間であるが、もし鳥であったならば」ということであろう。それを受けて①は、駿河路の三保の松原のその松に巢を作りたいものだ、という（「巢くはな」の「な」は未然形について願望を表わす終助詞で、万葉集に多くみられる）。三保の美しい松原は実際に子規が目にしたものであろうが、そこに「巢を作りたい」というところに一種の諧謔、ユーモアがあり、伝統的な風流意識、美意識に捉われている歌人には詠めぬ歌いぶりであろう。②は、もし鳥だったなら富士の嶺の清らかに見える月夜に、空を翔けたいものだ、美しい空想に遊んでいる。③は、それとは逆に又、俗に戻ったような歌いぶりでも、もし鳥だったら毘にかけて鳥をとろうとしている、その毘を鳥に知らせてやろうという。冗談めいたいぶりがユーモラスである。④の「たぐふ」は「いっしょにいく、伴う」という意味、「久方」は「空」にかかる枕詞で、もし鳥だったら空を飛ぶ天女に伴って一緒に空の彼方へ行きたいものだという。美しくも楽しい空想である。⑤は、もし鳥だったらかめめの群れに交っていたいという。それは、孤独になりがちな病床の寂しさを反映したものであろう。⑥は、もし鳥だったら、木曾の奥深い森の梢にお前を隠したい。そして己れ一人のものとしたいという。ここにも、生涯独身で、おそらく女性を知らなかった子規の楽しい無邪気な空想がある。⑦は、さらにその空想を追い求め、その恋人と二羽、空を舞い上がり、舞い上がりしたいという。⑧の「まきあひて」の「まく」は枕とする、ということから「共寝する」意である。もし鳥だったら恋人と二羽、羽を互いの枕としあって共寝したいという。⑨は、そこから更に、恋人に羽をおおい、霜を防いでやりたいというやさしい空想へとつながっていく。⑥以下の歌は、空想が空想を呼んで、恋する鳥の姿への憧れが楽しく、美しく詠まれている。結びの⑩で、もし鳥だったら、空にいる神の御前で歌ひ申しあげたいと

いう。以上のように「鳥にありせば」の十首は単なる仮定であり、空想にすぎない、ある意味では大人げない戯れの歌なのだが、戯れてその空想を追ううちに、つい熱中してしまう。連作の力によるものであって、ただ一首では、こうした愉快さは生まれまいだろう。

子規の歌として、おそらく一度も取り上げられたことのないような、こうした歌が私には実に楽しい。子規自身これらの歌を作っている時は病苦を忘れていたに違いなく、それがまざまざと伝わってくるのである。こんな歌を読むにつけ、子規を「写生歌人」の一語で片付け、「藤の花」の連作でのみ捉える見方を狭いと思う。

こんな楽しい歌を読んできて思い出されるのは、子規が自分は、前世は犬ではなかったかと考えていたことである。即ち明治三十三年一月十日「ホトトギス」に「犬」という題で次のようなことを子規は書いている。

昔天竺に閼迦衛あかいぬ奴国という国があった。その王も王奴王奴王（ワンワン王と読むのであろう）と言った。この王も民も犬を非常に愛した。ある時、その国の男が王の愛犬を殺したため死刑となり、次の世で、日本の信州の犬に生まれかわった。信州は山国で肴などないので、姨捨山へ捨てられ、山に捨てられた人肉を喰って生きていたが、犬でありながら人間を喰うのは罪深いことだと気づき、善光寺に駆けつけ、懺悔した上で、人間に生まれたいと祈願した。その時、犬の夢に阿彌陀様が現れ、信心すればその願いを叶えてやろうという。夢からさめた犬は、そこで諸国の霊場を巡礼し、自分が喰い殺した老婆の菩提を弔いながら、四国の八十八霊場をめぐり歩いた。八十七箇所を巡ったところで犬は倒れた。あえぎながら顔を上げてみると、地藏様は犬の願いを聞きとどけてやろうという。犬はうれしさに三度くるくるまわって死んだ。やがてそこに八十八人の老婆の怨霊である鴉からすが現れ犬の死体をついばんだ。通りがかりの旅僧がそれを気の毒に思い、犬の屍を埋めてやった。勝手に食わせておけば過去の罪が消え、次に生まれ変わる時の障害がなくなるはずだった。しかし、犬の死体は埋められてそれができなくなったため、犬

は人間に生まれ変わっても、病氣と貧乏で一生苦しめられることとなった―その犬こそ、自分自身ではないか、その根柢に病氣と貧乏に苦しめられ、犬のようにはい廻っている、と子規はいう。

これは子規の空想した前世譚である。作品は戯作であり、ユーモアすら漂っているが、テーマとする所は暗く、重い。なぜ自分がこんなに足腰の立たない病人となり、貧乏人として苦しめられているのか、その因縁話がブラックユーモア風に語られている。これは二十二才の時に書かれた「啼血始末」や「墨汁一滴」の中の閻魔大王が迎えにくるという話にも通じるものであるが、子規はこうして仏教の地獄や輪廻転生の觀念を利用してパロディーを書いた。本当に地獄とか転生を信じ、自分が犬の生まれ変わりだと信じていたわけではなく、一種のふざけ、遊びとして書き、いわば自らの不幸と遊んでいるのである。信仰厚い時代、信仰厚い人にあつては、本気で来世を信じられたかもしれない。しかし、近代人である子規にとって、そのような教えは、あくまで知識の上のことにすぎなかつた。不謹慎とも言えるような悪ふざけで己が業苦を語るところに子規の負けず嫌ひがある。

病氣について医学的にみれば、それなりの病因論は成り立とう。医科学的にみれば結核は結核菌のためだ、これが原因だというであろう。ところが、そのような目に見える科学的理由の奥に、人知の伺うことのできない「宿命」とか「運命」といったものがある。「前世の因果」という觀念も、それなりの合理性があつたと言えよう。不条理とも言える病いの不幸に、言葉も窮してしまふところで、子規は冗談を語って嘲笑する。前世に犬であつた業がまだぬぐいきれないため、この体となつたのだと。読む者も子規の不幸に同情しつつも、その苦いユーモアにあずかる。わが前世を「犬」だと空想した子規は、その現実から解放された自由な「鳥」に憧れた。想像や空想は心のエネルギーであり、こんな風に書きながら子規はその文学の世界を築いていった。そこに言語表現をもつ、人間独自の病いの姿がある。

想像の世界に遊ぶ子規は、反面、几帳面な細部の記録家であった。しかもその記録が、風雅を生きる姿勢と重なっている点がいかに面白い。「体温日記」(明治三十三年五月二日)と題された一連の作がある。

①、五月一日(体温三十九度六分)

山吹は散り菜の花は実になりて五月一日われ厄やくに入る

②、五月二日(体温三十九度一分、従弟来)

みすず刈る信濃の白坂に雪はふれれど蕨わらび萌ゆとふ

③、五月三日(体温三十八度九分)

病み臥せる床にささんとおぎのりし菖蒲匂ひ葉根はなかりけり

④、五月四日(体温三十九度六分 俳句会)

「藤の花長うして雨ふらんとす」とつくりし我わが句人は取らざりき

⑤、五月五日(体温三十八度二分)

たて川のさちをがりより贈り来し牡丹の花に文結びあり

⑥、五月六日(体温三十九度四分)

鉢植に二つ咲きたる牡丹の花くれなる深く夏立ちにけり

⑦、五月七日(体温三十八度五分)

はしきやし少女に似たるくれなるの牡丹の陰にうつうつ眠る

詞書をとって歌だけみたら、いずれもさ程の歌ではないかもしれない。しかし、日付があり、その下に、その日の体温を記して、日記風にこうして並べてみると、子規の病床生活が髣髴と浮かぶ。高熱にあえぐ病床の単調な生

活の中にも、その日、その日の生活がある。子規はそれを大切にしているようだ。これらの作品は歌日記とも呼ぶべきものだが、体温を詞書風に記すという趣向など子規以外に誰も考えた人はいないだろう。体温の記録といったものまで、ここでは風雅な遊びとなっている。

①の歌は、山吹は散り菜の花は実をつけた。そんな植物達の営みとは別に自分はこの日、五月一日九度六分の熱が出て、本当に厄（＝わざわい、不幸）に入ったという。②は、従弟が見舞いに訪れ、その話の中に信濃の白坂に雪が降ったが、その中で蕨も萌え出したという話を聞き、それを歌にしたものである。（なお「みすず刈る」は「信濃」にかかる枕詞である）③は、病床の花瓶にさそうと買った菖蒲の、匂いはあるものの、葉も根もないことだという。「おぎのる」は、代価をあと払いにして借りることをいい、おそらくは歌人が五月五日端午の節句も近いというのでその病床の花瓶にさしたものである。葉も根もないのは寂しいとはいえ、その匂いに慰められたことであろう。④は、この日、子規庵で臨時の句会が開催され、青々、格堂、虚子、四方太、三子、孤雁、墨水、潮音、牛伴、麓、左千夫、鳴雪ら十二人が参加（麓と左千夫は初参加）し、にぎやかに句会が行われた。その時、自分の作った「藤の花長うして雨ふらんとす」と作った句を誰も選にとってくれなかったというのである。自信作でもあったろうか、俳句の五・七・五をそのまま生かして後に七・七をつづけて歌にしまっているのが面白い。⑤は、伊藤左千夫から贈られた牡丹の花に手紙が結びつけられていたという。「立川」は東京本所にある川の名で左千夫はそこに住んでいた。牡丹の花に手紙を結びつけて贈ったという風流に心打たれたのである。「左千夫より牡丹二鉢を贈り来る一つは紅薄くして明石潟と名つけ一つは色濃くして日の扉と名つく」という詞書を添えて「草つみ病みふせるわが枕辺に牡丹の花のい照りかがやく」「病みふせるわが枕辺に運びくる鉢の牡丹の花ゆれやまず」など六首をものし、この歌はそのうちの一首ともなっている。⑥は、同じその牡丹を詠んだもので、牡丹の花の紅

を愛でながら過ぎゆく夏を惜しんだ歌である。⑦も、同じその牡丹をめでたもので、いとしい乙女にも似る紅の牡丹の陰に自分はうつうつと眠ったことだと、牡丹を恋人のように捉え、そのもとに安らかに眠る満ちたりた心を詠んでいる。

こうした「体温日記」の他に、同じような日記歌とも呼ぶべきものがある。「週間記事」の見出しのもとに、同じようにして日付を入れカッコ書きに簡単にその日の出来事を記し、それを歌にして「日本」に発表したものである。

① 明治三十三年三月二十八日（午後電降ル）

うららかにガラスを照す春の日にはかに曇り電ひようふり来る

② 三月二十九日（「我病」を草す）

ともし火のもとに長ぶみ書き居れば鶯鳴きぬ夜や明けぬらん

③ 三月三十日（把栗はりつ来る）

詩をつくる友一人来て青柳に燕飛ぶ絵をかきていにけり

④ 三月三十一日（浅草公園失火新聞）

翁さび火鉢かへして猩々しょうじやうが火事をおこしきと聞けば可笑おかしも

⑤ 四月一日（短歌月次例会）

歌をよみにつどひし人の帰る夜半を花を催す雨瀧の如し

⑥ 四月二日（湖村、節、四方太来る）

詩人去れば歌人坐にあり歌人去れば俳人来り永き日暮れぬ

⑦ 四月三日（実方墓辺の薮柑子を送り来る）

実方の墓辺に生ひしやぶかうじ人に抜かれて歌によまれけり

①は、この日の午後、雹が降ったという天候をそのまま歌にしたもの、②は、小説「我病」を書いているうちに夜が明けたというのである。「我病」は明治二十八年日清戦争従軍記者として決死の覚悟で赴いた時の体験をもとにした小説であるが、病いについての記述のないままに未完に終わっている。その中に、二匹のつがいの稲子が「吾手のひらに黒い血を残して」別れ別れになって飛んでいったという記述がある。これはおそらく、その後の病いを述べようとする伏線的な記述であり、従軍が病いの決定的な悪化―死へとつながっていったという反省がこめられているようにも思われ、カリエスによる臥病生活の中で、病いの悪化をもたらしした無謀な体験を述べようとしたものである。③は、漢詩人であり、俳人でもあった福田把栗が見舞いにやって来て絵を書いていったことを詠んだもの、④は、新聞記事で浅草公園で火事があったことを、年をとって火鉢をひっくり返した猩猩（＝酒をよく飲むという想像上の動物）が火事を起こしたと聞けば、おかしく感じられるという。おそらく火事の原因は年寄りが酒に酔って寝込んでしまったと記事にあったのだろう。

⑤は、この日の午後、根岸短歌会が催され参会者十二名（長塚節と伊藤煙村はこの日初めてであった）茶人でもあった左千夫が茶をたて散会は夜十時半、「四月短歌会」の記事に「四月一日午後、例会を開く。主客合せて十二人。運坐（＝出席者が俳句・短歌を作り、すぐれたものを互選する会合）十題、星、柳、桃花、化物、乾胡蝶、剥製の鳥、富士の巻狩、花見茶番、寒山捨得図、半面美人。互選の結果、高点を得たる歌は次の如し」とあって、それぞれの歌が紹介され、末尾に「この外佳作多し。次の兼題（＝「兼日題」）の略で、歌会・句会などを催す時、あらかじめ出しておく題）を芝居十首と定め茶を飲みて散会す。時に十時半、花を催すの雨落ちて瀧の如し」と記さ

れている。歌の意味は、歌会に集まった人が帰る夜半になって、桜の花を咲かせる雨が滝のように激しく降ったということであろう。なお、この日「こやす」という動詞について議論となり、それがはがき歌（後述）の材料となっている。詞書の「月次」は「月並」とも書き、「毎月」ということから、平凡、陳腐なことをもいうようになったが、この場合は毎月、定例のことである。

⑥は、この日漢学者、漢詩人であった桂湖村、歌人の長塚節、俳人の坂本四方太の訪れがあったことを詠じたもの、⑦は、藤原実方の墓の近くに植えられていた藪柑子やぶこうじを送ってきたことを詠んだもので「人」はそれを抜いて贈った人、「歌によまれけり」とあるが、詠んだのは子規自身で歌人の墓に植えられていたものが歌に詠まれたということに興味を感じたのであろう。

以上のように、子規は病いの中にあつて、その病いを通して歌に生きる決意、その病いの生活の記録、さらには、病いから解放された奔放で無邪気な空想まで、多様な詠みぶりで短歌を作っているのである。

三 天田愚庵との交流

子規の短歌は書簡の中にも数多く見える。子規は生涯にわたって好んで書簡を書いたが、それは著述のスタイルにも影響している。歌論として有名な「歌よみに与ふる書」も、書簡体の候文で歌人に呼びかけるといふ形をとつたものだし、連載随筆も読者を意識し、読者に呼びかけ、語りかけるような書簡的な文体が多く見られる。短歌も書簡のやりとりの中から生み出されたものが多く、書簡は子規短歌を生み育てる一つの契機となっている。その中から、ここでは天田愚庵宛の書簡の中にみられる歌を紹介してみたい。

天田愚庵あまだぐあん「愚庵」は歌人としての雅号で、出家して「鉄眼」、本名は五郎）は安政元年（一八五四年）磐城国平で生まれ、明治元年、十五才の時、板垣退助を参謀とする西軍に平城が攻撃を受けた際、父母、妹が行方不明となった。後、東京に出て憂国の士と交わり、或いは台湾征伐に従軍したり、又旅回りの写真師になったり、さらには又清水次郎長の養子となるなどしたが、三十四才の時、天龍寺の滴水禅師に師事して仏門に帰依、「鉄眼」と号した。愚庵は戦乱のさ中に生別した両親、妹を必死になって探し求めたが、ついに再会することはなかった。堂々たる偉丈夫で気骨あふれる国士であると同時にきわめて純情な人情に厚い人であったという。明治九年二十三才のころから歌を作り、特に出家してからは歌の数も増え、子規が短歌革新ののろしをあげる以前に、すぐれた万葉調の歌を残している。亡くなったのは子規に遅れること二年の明治三十七年、五十一才で、子規と同じように結核を患っていた。

子規と愚庵の交流は、陸羯南くがくなんを通して明治二十五年十一月二十五日、虚子と共に京都の清水にいた愚庵を訪れた

ことに始まる。東京と京都ということで二人が直接あいまみえたのはこの時限りであったが、互いに信頼と尊敬をよせており、子規の愚庵宛書簡は明治三十年四通、三十一年四通、年月日不詳のもの一通の計九通が全集に収められている。

明治二十九年、日本新聞社員であった寒川鼠骨さむかわそこつから子規の病いが重いことを聞いた愚庵は「まだ死ぬな雪の中にも梅の花」「独ひとりして急ぐ旅かは雪のそら」「こたつして君和韻せよ十二勝」などという句をもつて見舞った。そして万一、死期が近いと思うならかたみに「十二勝を和してくれ給へ」と子規に頼んでいる。これは十二の景勝地をとりあげて、それに句を添えてくれというものである。書簡の最後に「子規宗匠」という言葉を使い、俳人としての子規に対する敬意を表わし「見舞して我先立つも知れず雪の路」の句を添えたが愚庵自身、二十九年五月、七、八合に及ぶという咯血があり重態であった。子規は愚庵の願いに応えて、「松蘿玉液」の中で「愚庵十二勝」と題して発表した。（「日本」新聞。明治二十九年十二月二十四日）これは「梅花谿」「採菊籬」など十二の風景に子規、碧梧桐、虚子、把栗が四句を添えたものである。

愚庵は、これを読んで感謝、三十年五月「園中ノ柿、秋になり候はば一筐はし差し上げ申すべしと今より待ち居候ふ」と柿を送る約束の書簡を出す。もちろん、子規が柿好きであり、「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の句があることを知つてのことである。子規もこれを喜び「十二勝以外にうまさ柿の木も御庭にこれ有り候ふ趣にて、この秋は御送り下され候ふとの事、待ち居申し候ふ。小生もそれ迄決して死に申すまじく、柿の実は鳥に落とさせぬよう、くれぐれも御願申上げ置き候ふ」と返書した。

その秋、約束通り、桂湖村が京都から帰ったさい、愚庵の依頼を受けて「つりがね」という柿十五顆と松たけ蕈をたずさえて子規を訪れる。子規はその礼状として「多年の思ひ今日に果し申し候ふ」と記して次の三句を添えた。

御佛に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

つりがねの帯へたのところが渋かりき

この礼状を認めた翌十月二十九日、湖村が愚庵の葉書をもつて再び子規を訪れる。子規は愚庵の歌に心打たれ「おのれもうらやましくて何をかな（||何か歌を詠んでみたい）」と思ひ候へとも言葉知らねばすべもなし。されはとて（||だからといって）、このまま黙って過ぎんもなかなか心なきわざなめり（||このまま歌も詠まずに過ぎすのもかえって心ないことであろう）と俳諧歌（||俗語を使った洒落、機知を中心とする歌）とでも狂歌（||着想、用語などに滑稽、諧謔をもち込んだ歌）とでもいふべきもの二つ三つ出し放題にうなり出し候ふ（||出まかせに詠みました）。御笑ひ草ともなりなんには（||お笑い草にでもなったとしたら）うれしかるべく」と謙虚な言葉を連ね「愚庵禪師御もと」と詞書し、次のような歌を詠んでいる。

- ①、みほとけにそなへし柿のあまりつらん我にそたひし十あまりいつつ
- ②、柿の実のあまきもありぬかきのみの渋きもありぬしふきそうまき
- ③、籠にもりて柿おくりきぬふるさとの高尾の山は紅葉そめけん
- ④、世の人はさかしらをすと酒のみぬあれは柿くひて猿にかも似る
- ⑤、おろかちふ庵のあるしかあれにたひし柿のうまさのわすらえなくに
- ⑥、あまりうまさに文書くことそわすれつる心あることな思ひ吾師

発句よみの狂歌いかが見給ふらむ」

子規自ら「俳諧歌」「狂歌」というように、これらの歌にはユーモアが漂っている。即ち①は、仏前に供えた柿

があまったのであろうか、私に十五箇の柿を送つて下さったことだと、単に送つてくれたことに感謝するのではなく、余ったから送つてくれたのだらうかと詠んでいる点に面白さがある。感謝の歌として、型破りのものだが、こんな歌をかわしあえるところに二人の親しさもうかがえるし、事實は余ったからなどというのでなく前々から愚庵は子規に柿を送るから、それ迄長生きしてくれと祈り、約束していたのである。子規はそれをわかりながら愚庵をからかうような調子でこう詠んだのである。②も、一般には御札としてはどれもおいしかった、と書きそうな所を正直に、甘い柿も、又渋い柿もあつたという。渋い柿はおそらくは食べられたものではなかつたらうが、渋いのがうまかつたとする所に諧謔とおかしさがある。前掲の俳句「つりがねの蒂のところが渋かりき」を一步おし進めて「渋いのがうまかつた」と発展させて、渋い柿に顔をしかめ、それをうまいと言っている子規の顔さえ浮かんでくる。

③は、籠に盛られた柿から愚庵の住む京都、高尾の山も紅葉が始まったのであろうと山の様子を想像したもの、④は、大伴の旅人の酒をたたえる歌―「あな醜賢さかしらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似る」(万葉集三四五)。ああ、みつともない。偉そうにして酒を飲まぬ人よくみたら猿に似ているよ)「賢さかしみと物言ふよりは酒飲みて酔ひなきするし優りたるらし」(万葉集三四一。偉そうに物をいうよりは、酒を飲んで酔い泣きする方がましであるらしい)を意識して作ったものであることは勿論だが、それ以上に愚庵の「酒のまば甕かめの腹みて並べ飲め酔ひ泣きすともさかしらなせそ」(酒を飲むなら、いっばいにみたした甕を並べて飲め、たとえ酔って泣くことがあつても、りこうぶるなよ)という歌が意識されていよう。④の歌はつまり、旅人は、利口ぶつて酒を飲まぬより、酒を飲んで泣く方がよいといったが、そこにもなお利口ぶる意識がある。それに比べたら私など柿を食つて猿そのものだと自嘲したものである。自嘲ではあるが、そこには暗さはなく、無邪気に柿を楽しむ子規の姿があり、ほほえみを誘う。⑤は、「愚か」と名づけたその「愚庵」の主から送られた柿のうまさ忘れられない、と親しみと諧謔のうち

に感謝の心を表わしたものの。⑥は①の歌でいうように「余り」ものの柿が「あまりに」うまいのでと洒落て、返事が遅れたが感謝していることを忘れないでほしいという。子規にとって愚庵は尊敬してやまぬ人物であったことが「吾が師」という言葉に伺われる。

このころ（明治二十九年）までに、子規は数多くの短歌をものしてはいたが、自分を俳人―「発句よみ」と考え、短歌については素人の手すさびという意識があったと思われる。「発句よみの狂歌いかが見給ふらむ」というこれらの歌に添えた結びは、単なる謙辞ではなく、狂歌・短歌はまだまだということを示している。子規の歌が成熟し、もはやたわむれ、余興とはいえぬ数々の名歌―

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり
佐保神の別れかなしも来む春にふたたび逢はむわれならなくに

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす

などといった作品を生み出すのは翌、明治三十一年四、五月のことである。これらの歌は特定の個人を意識して作られたものではなく、初めから「日本」新聞に発表する歌として作られたものである。それら公けの場に発表する本格的な短歌がある一方で、私的な書簡の中にこうしてユーモア、親しみと諧謔をこめた短歌を作っていることが興味深い。ユーモアとは多くの場合、個人的な親しみの中に生まれるものと言えるだろう。

ここで少し横道にそれるようだが、子規が短歌をどう考えていたのかをみてみたい。明治三十一年二月十二日から三月四日まで十回に分けて発表された「歌よみに与ふる書」には次のような有名な一節がある。

「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集にこれあり候ふ。その貫之や古今集を崇拜するは誠に気の知れぬことなど申すものの、実はかく申す生も数年前迄は古今集崇拜の一人にて候ひしかば今日、世人が古今集を崇拜する

気味合いはよく存じ申し候ふ。崇拜して居る間は、誠に歌といふものは優美にて、古今集は殊にその粹を抜きたる者とのみ存じ候ひしも三年の恋一朝にさめてみればあんな意気地のない女に今迄ばかりにされて居った事かと、悔やしくも腹立たしくも相成り候ふ」

「歌よみの如く馬鹿なのんきなものはままとこれなく候。歌よみのいふ事を聞き候へば和歌ほど善き者は他になき由、いつでも誇り申し候へども歌よみは歌より外の者は何も知らぬ故に歌が一番善きやうにうぬばれ候ふ次第にこれあり候」

痛烈な批判、罵倒である。これを読んだ愚庵は子規をたしなめ、論す書簡を出した。それに対して、子規はまず「歌の事につき、御教誨をこうむり有りがたく存じ候ふ」と感謝の言葉を述べた後、多少の弁解を交えつつ、自分の短歌観を述べている。(明治三十一年三月二十六日書簡)

第一に、「梅が香」を自分が非難したのはそれを必ずしも歌に詠んではならないということではないが「従来の歌のごとく、梅が香を闇とか月とかいふくらの事ばかり配合して、同じような事詠み候を誹りたる迄に候ふ」という。つまり、「梅が香」といえば闇とか月などととりあわせた、パターン化したマンネリズムを非難したものだといふのである。

第二に、雅語か俗語かの問題については、いちがいに俗語をよしとするものではなく、それぞれの内容によって選択すべきである、ただ現代の歌人は雅語をもって俗な歌を作り、雅語さえ用いれば雅びな歌になると思つてゐるのは間違いだという。「心あてに折らはや折らむ初霜のおきまとはせる白菊の花」(どうしても折ろうというのなら、当て推量で折ることになろうか。初霜が一面に降りて白菊を折ろうとする私をとまどわせることだ)などという躬恒みつねの歌よりも「ベラボローメくそをくらへと君はいへど(コン畜生にわれはあらなくに)」の歌の方が「小児の」

ように「善も知らず悪も知らぬ天真爛漫のままに振舞ふが如く感じられて、「心持よく覚え申し候ふ」という。この「ペラボーメくそをくらへと君はいへど」というのは、古今集や貫之の歌に対する子規の罵詈雑言を、愚庵がそれほどまでに非難するのはどうかと論じた言葉であるが、それに対して子規は、「コン畜生にわれはあらなくに」の七七をもって戯れて一首としたものである。あなたは古今集や貫之の和歌を「ペラボーメくそをくらへ」と非難するのをゆき過ぎだと教えてくれますが、自分は畜生ではないのだから、悪いものは悪いと言わざるをえないのです、と応じて戯れの一首としたものであろう。

この意見は、要するに真実が大切だと言おうとしたもので、風流を気どり、雅びを装ったものより、率直明快に真実を吐露した歌が良い短歌だと主張したものである。

子規はさらに愚庵宛書簡の中で、自分が「古来の歌の想を破壊すべし」などといったのは、「古今以来今日に至る迄の、弊風をいふものにして万葉の歌の想を破壊せんとする者にはこれなく候ふ。万葉集は大いに興すべきものだと考えていると述べ、愚庵と同じように万葉集は高く評価していると述べている。

書簡の末尾で、自分が歌や詩、俳句を作るのは職業のようなもので、体に悪いと知りつつも熱中して夜をふかしてしまふ。それも仏教でいう「執着の迷い」というものであると述べた後、次のように結んでいる。

「私の如き煩惱のはげしき奴は執着の極点に達するか、大悪事を為したる後かにあらざればとうてい解脱致すまじくや候はん。天下の事が順当にいつてくれればよく候へども、生来多病にて、ついに不具に迄なるがごとき不幸に沈み候へば、満心の不平はやるかたなく、従つて悪口なども出がちにあいなり候か。宿業にや候ふべき」

子規にとって短歌は、単なる個人的な趣味などといったものではなく、名譽心とも結びついた「執着」の対象であった。その歌論も世の歌人達の誤りを正して、真実に導こうという指導者の意識に立つものである。ただそこに

は、公正な、理性的な判断が欠ける点があった。それは思うにまかせぬ不幸な病人となつてしまつたために「満心の不平」が爆発して、過激な文章になつてしまふからではないかと、多少反省をこめて述懐している。

三月二十八日の漱石宛の書簡の中で子規は「歌につきては内外ともに敵にて候ふ。外の敵は面白く候へども、内の敵には閉口致し候ふ」(「外の敵」は愚庵はじめ子規に反論する歌人達、「内の敵」とは日本新聞社の先輩同僚等を指す)と書いている。当代の歌人への痛烈な罵倒は、当然のことながら数々の反感を呼び起こしていた。その反感、反論に、「病氣」のためだとするのは口実とも見られようが、私は単なる口実ではなく、古今集等に対する批判(怒り)の底には「病氣」からくる感情生活があると思う。文学論、歌論は数多いが、「歌よみに与ふる書」ほどもにも激越な怒り、非難に満ちた歌論はきわめて珍しい。重い病いの時、一切の社交辞令や世間的な約束が空しいものとなる。子規短歌における正直さ、率直さの生むユーモアというものも、そのことと関係があると思われる。世間的な虚礼、まじめさ、あるいは月並みの俳句や短歌、それらはパターン化されたものであり、それを揶揄し、そこにある偽善性を批判した子規の短歌は病者の求める真実の尊重とも思われるのである。

それにしても「歌よみに与ふる書」を連載しているころの子規は短歌に没頭していた。三月十八日の愚庵に宛てた書簡の中に次のような一節がある。

「このごろ歌をはじめ候ふところ、あまり急激なりとて、陸翁はじめ皆々に叱られ候へども、やりかけたものなら死ぬるまでやる決心にござ候ふ。昨夜も湖村子来訪、歌の話に夜の二時頃まで更かし申し候ふ。同子も漢語が多過ぎる、と申して忠告いたしくれ候ふ。前月末頃は歌のために毎夜二時三時に及び、あるいは徹夜など致し候ふ。このごろの弱りも、多少はそれにも原因致し候ひけん」と存じ候ふ。もつとも、愚見は漢語を用ゐざれば歌にはならず、など申すにはこれなく、万葉調などは大いに好む所にござ候ふ。人は誤解致しをり候ふ」

病床にありながら短歌に情熱を傾ける子規の姿がここにも伺われる。「神の我に歌をよめとぞのたまひし病ひに死なじ歌に死ぬとも」という短歌は決して口先のことではなかったのである。

愚庵との交友は万葉調の先達歌人として尊敬するところから生まれたことはもちろんだが、そればかりでなく、その人間性に魅かれたことも大きな理由と考えられる。愚庵は当時、歌人としてよりも、その数奇な生涯と人間性において知られた人であった。愚庵と子規はその気質、生き方において似通った点があったのではなからうか。陸羯南は「愚庵遺稿」の跋文中に次のようにいう。

「彼は四十年近くなるまで俗界の辛苦甘楽をなめつくし、社会の最も低い階級まで身を入れてありながら少しも墮落せず、士君子たるの志操を少しも変へず、二十前後まで受けた武士風の気質というものは、種々なる境界を経ても依然として存在し、最後に入道して超然俗界の上に立ち、世の名流と交わって、よく終わりをつけたという一段である。これは尋常の者では出来ぬことと思ふ」（大坪草二郎「愚庵の生涯とその歌」昭和十五年刊より）

子規は愚庵ほどに多彩な人生遍歴を味わった人ではない。しかし、子規も又、二十二才の時の結核の発病、二十才のカリエス以後、極端なまでの病苦の生活の中で「士君子たるの志操」を維持し、文学界に「超然」と立つ「武士風の気質」をもった人物と言えるのではなからうか。又、子規がその病床の中で、禪的な精神に親しみ、その末期において、一種の禪的な悟りともよぶべき境地に到達しているのも、その宗教感情において通うものがあつたらではなからうか。愚庵は禅僧であり、子規の愚庵崇拜の中には単に歌人としてだけでなく禅の心に親しみを感じていたこともあつたと思われる。

「愚庵和尚のもとへ」と題して「日本」新聞の明治三十三年三月三十一日の雑詠に、子規は次のような歌を發表した。

①、歌をそしり人をののしる文を見れば猶なほながらへて世にありと思へ

②、から歌につくりてめでし君が庵の梅の林は今咲くらんか

③、折にふれて思ひぞいづる君が庵の竹安けきか釜つつがなきか

①の歌にいうように、歌を非難し、歌人を罵倒する文章を読んだら、自分が世に健在であると思つてほしい―戦うことは、自分の生きている証拠であるといわんばかりの詠みぶりである。俳句革新、短歌革新の、その「革新」とは、戦いをもつてなされたものであり、戦いの人、子規には士族の末裔としての血が流れていた。②は、漢詩に詠んで讚えた愚庵のその庵の梅は今ごろ咲いているであろうかと、かつて訪れた時のことを偲んだもの、③も、同じように、折あるごとに思い出す愚庵の庵の、あの竹は相変わらず風にそよいでいるだろうか、相変わらずあの釜で元気に茶をわかつて飲んでいるであろうかと愚庵の安否をたずねたものである。付記しておけば、この短歌は明治二十五年十一月十五日、虚子と共に愚庵を訪ねた時のことを偲んだものである。（この三日前の十二日は、一人を訪れている）即ち、「瀬祭書屋日記」には次のような一節がある。

「遊粟田知恩高台壺清水大佛通天此日雨。虚子来。共訪鉄眼和尚。閑談干夜深。浄林の釜に昔をしぐれけり」

こうして子規と愚庵は、わずか二、三度の出会いながら、書簡を通して、心を通わせ続けた。それは俳句や短歌創作の場ともなったのである。その俳句や短歌には温かいユーモアと親しみ、愛情がこもっている。

四 童心と諷刺

子規の短歌には、童心のいかにも天真爛漫な無邪気な短歌がある。

- ①、鳴神なるかみのわつかに鳴れば唐茄子なごの臍へそとられじと葉隠れて居り
- ②、鳴神の鳴らす八鼓やこことごとく敲きやふりて雨晴れにけり
- ③、鳴神の落としし太鼓拾はんと惑へる顔を見ればをかしも
- ④、世の中は臍もあらはに湯あみ時鳴神の子や品定めする

「夕立」の詞書のもとに「日本」新聞の明治三十一年八月二日に発表された八首のうちから五首採ってみた。いずれの歌も雷の激しさは鳴神が天上で太鼓を鳴らしたものだとか、鳴神は臍をとるといふ民間の伝承をふまえたものである。「かみなり（雷）」という言葉はもともと「かみ（神）」が「なる（鳴る）」という言葉からきたものだが、それを「鳴神」と表現し、擬人化して詠んだユーモラスな歌である。①の歌は、雷が鳴るとカボチャはその臍をとられまいと葉隠れていると興じたもの。②は、鳴神が持っている八つの太鼓をすべて叩き破って、ついに雨も晴れたと、激しかった雷雨を詠んだ。③は、その雷雨の後、雷の落とした太鼓を拾おうと（おそらく雨晴れて道に繰り出す人をこう捉えたのだろう）探し歩く人を見れば滑稽に感じられる、④は、人々が臍もあらわにして行水につかっている時、鳴神の子は空にいて、どの子の臍をとろうかと品定めしているという、漫画の一コマを思わせるような空想である。

以上はいずれも雷雨に触発されて空想の世界に遊んだものだが、最初から空想的なものを素材として歌に興じた

ものもある。たとえば次のような「桃太郎」という詞書をもつ一連の作。（明治三十一年六月二十七日「日本」新聞発表）

- ①、桃の実の二つにわかれてあれいでにし名におへりけむ桃太郎かも
- ②、もろもろの鳥けたものをあともひて鬼が島なる鬼打ちに行く
- ③、ききし女は旗ふりかざし猿彦はますらをさびて弓杖つくも
- ④、昔々をぢうば住めり子もがもと思へど老いぬ子はあらずして
- ⑤、をぢは山へうばはとき衣そそぎすと川辺に立てば桃流れ来つ
- ⑥、日の本にたぐひあらしの黍団子君がいくさを祝ひてぞ食す
- ⑦、鬼こもる大城戸うち破りをたけびしたるぶち犬の友
- ⑧、船八船車八車ことごとに積みし宝の数も知られず

子規は病床で桃太郎の話を読むことがあったのだろうか、それとも何かのきっかけで幼少に聞いた話を思い出したのであろうか。おそらくは後者であろうが、それにしても大の大人が「鳴神の」と詠んだり、桃太郎の話に歌にしているのは、他の歌人にはみられないことであろう。①の歌は、桃の実が二つに割れて生まれたという、それにちなんだ名をもっている桃太郎だよ、という。以下同じ調子で桃太郎の話そのまま歌にしたもので、②は、多くの鳥、獣が伴って鬼が島にいる鬼を打ちに行くことだ、③は、きじ（女）は旗を振り、猿（男）は男らしく弓杖について鬼が島へ出かけたことだ、という。④は、昔々おじいさん、おばあさんがいて、子供が欲しいと思っていたが子のないままに年老いてしまった、⑤は、おじいさんは山へ、おばあさんは汚れた着物を洗おうと川辺に立ったところ、桃が流れてきた、⑥は、日本に比べるものもないほどおいしい黍団子を桃太郎の戦を祝って食べることだ、

⑦は、鬼のこもっている城の戸をうち破って、ぶち犬が大きな叫びをあげた。⑧は、八艘の船、八台の車に山と積んだ宝の数も知れない、というような、いずれも無邪気な明るい単純な歌である。子規のこのような歌はあまり世に知られていないものであるが、こうした歌と、「絵あまたひろげて見てつくれる」という詞書のもとに作られた次の十首（明治三十二年二月、「ホトトギス」発表）の距離はきわめて近いといってもいいのではあるまいか。

- ①、なみあみた佛つくりかつくりたる佛見あげて驚くところ
- ②、もんごるのつはもの三人二人立ちて一人すわりて楯つくところ
- ③、岡の上に黒き人を立ち天の川敵の陣屋に傾くところ
- ④、あるじ馬にしもへ四五人行き過ぎて傘持ひとり追ひ行くところ
- ⑤、木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ
- ⑥、うま人の裾濃すそごのよそひ駒たてて遠くに人の琴弾くところ
- ⑦、かきつはた濃き紫の水満ちて水鳥一つはね搔くところ
- ⑧、いかめしき古き建物荒れはてて月夜に獅子の壇のぼるところ
- ⑨、屋根の無き屋形の内に男君姫君あまた群れゐるところ
- ⑩、看板にあへかは餅と書いてあり旅人二人餅くふところ

いずれも歌の結びを「ところ」という形で結んだ措辞の新鮮さが目を引く。「ところ」とは、そのようなところを描いた「場面」ということである。どの歌も絵を病床に広げて写生したもので、その絵に心打たれたとか、面白かったなどという感想めいた言葉は一切なく、ただその絵がどういふ場面を描いた絵であるかを写しとっている。しかし、不思議な味わいがあり、歌を読むと場面がさながらに浮かんでくる。

①の歌の「なむあみだ」は「なむあみだ仏」という浄土教の唱名だが、それを序詞ふう「佛」を導く語としておいている。仏師が自ら作った仏像を見上げて深い宗教的な感動に捉われている場面であるよ、というような内容だが「なむあみだ佛」という声まで聞こえてくるような歌である。②は、蒙古来襲の絵を見たのであろうか。平明な単純な表現のうちに蒙古の武人の姿が活写されている。「楯つくところ」は「武人が文字通りに楯をついてすわっているというだけでなく「楯をつく」―反抗する意味とダブって気迫がある。

③は、天の川が敵の陣家に傾くあたり、岡の上に立つ黒い人影が不気味な緊張感を伝える。④は、主人は馬に従者がその後ろを四五人、その後遅れて傘持が一人従っているという。⑤は、釈迦涅槃図では、入滅した釈迦を囲んで人間だけでなく、動物まで嘆き悲しんでいる。その中から像や蛇の姿を詠んだもの、⑥は、貴人が裾を濃く染めた着物を来て駒を引いていく。遠くでは人が琴を弾いているという場面、⑦は、かきつばたが紫に咲いている。その紫の水も豊かに流れ水鳥が一羽、羽根を搔いているという場面、⑧は、いかめしい古い建物も―エジプトの神殿でもあろうか―荒れ果て、月夜にその高殿にライオンが登っているという場面、⑨は、屋根のない―屋根を描かない平安朝の絵巻などの描き方であろう―屋敷の中に遺族や姫君たちが大勢遊んでいる場面、⑩は、看板に「あへかは餅」（＝安倍川餅）と書いておりその中で旅人が二人餅を食っているという場面で、東海道を描いた浮世絵の情景を歌としたのであろうか。

子規の写生は、閉ざされた「病床六尺」の空間にあつて、いかに物を見るか、物を見ることの喜びをいかにして発見するかということと結びついていた。「桃太郎」の歌をあらすじをなぞっただけでつまらないという人はこれら一連の絵を見て作った歌もつまらない、ただそのままだということかもしれない。しかし悲しいことを悲しいと詠み、面白いことを面白いと詠んで人に伝わるわけではなく、悲しかったそのことがらについて、面白かった、そのことが

らについて詳しく描けば悲しいとも又面白いとも言わずしてその心は通じる。写生の強みは、具体的に生き生きと対象の特質を捉える点にある。桃太郎の歌にも、絵を見て作ったこれらの歌にも、己れを忘れてその話の世界、絵の世界に没入している子規の姿がある。仏教的に言えばそれは無我の世界、童心の世界であり、そこにユーモアが生まれている。

そんな童心の世界に遊ぶ一方、子規はなかなかの諷刺家であった。それは寸鉄、人を貫く鋭い歌論、豪放率直にいいたいことをいってはばからぬ痛烈な歌論にもよく伺えるところだが、歌においてもなかなか痛烈なものがある。

明治三十一年八月十一日「日本」新聞に「獵官（＝官職を得ようとして多くの野心ある者が競う）声高くして炎熱いよいよ加はる。戯れに蒼蠅あおばえの歌を作る」と詞書をつけて発表された八首。

- ①、つかさある人をたとへば厨くりやなる食ひ残しの飯の上の蠅
- ②、馬の尾につきて走りし蠅もあらんとりのこされし牛の尻しつの蠅
- ③、屎虫くそむしの臭きを笑ふ笑ふものは同じ厠かわやの屎の上の蠅
- ④、憎き者うなしねを刺す蚊はあれど睡らんとする顔の上の蠅
- ⑤、山も見えず鳥もかけらず五百日行く八重の汐路の船の中の蠅
- ⑥、世の中は馬屋のうしろの畑はたけに生ふる唐撫子とうなすの花の上の蠅
- ⑦、ここも猶うき世なりけり草鞋編む田舎わらしのをぢの背の上の蠅
- ⑧、世の中の憎さもここに終りけり炮烙ほうらくの尻しつの糞もちの上の蠅

地位や名声、金銭を求めてあい争う役人の世界。それは現代においてもしばしば見られることである。明治になつて、誰でも立身出世の道が平等に開かれた。特に国家に保障され、様々な特典をもった官僚は魅力ある仕事であ

り、多くの野心ある者が争ってこれを求めた。子規はそれを蠅に見立てて罵倒した。即ち①の歌は、官位のある人を譬えてみれば、台所の食い残しの飯の上にたかる蠅のように醜いものだという。②は、馬の尾にとりついて走る蠅もいるだろう、それを見て、牛の尻についている蠅はとり残され焦っているに違いない、とそれぞれの上司のもとにあつて自分の損得を計算する出世競争を諷刺した。③は、屎虫は臭いと笑っているが、笑っているのも同じ厠の上の汚い蠅である―どれも五十歩百歩の不汚な存在だと役人を諷したものだ。④は、憎らしく感じるものとして首もとを刺す蚊はあるが、今眠ろうとしている顔にあつかましくたかる蠅にはかなわない―役人の厚顔、無恥位いとわしいものはない、という。⑤は、山も見えず、飛ぶ鳥の姿も見えない、陸を離れて五百日も行く海原の、その船の中にさえ蠅はちゃんとはびこっている―役人の不正は全くどこにも見られると諷刺したもの。⑥は、世の中を譬えてみれば、馬屋のうしろの畑に生えているカボチャの花にたかる蠅のようなもので、こんな所にと思われるようなところにも役人の不正がはびこっているという。⑦は、ここも又、憂き世であつたことだ、草鞋を編む田舎の老人の背にさえ蠅がとまっているように、どこまでも不正のなくならないという。⑧は、世の中の憎らしさ、腹立たしさももう極限だ。土鍋の尻にわずかに残っている餅にさえ、蠅がたかっている。そのように、どこにでも役人の不正がみられるという。

②以下の歌は、詞書がなければ官僚の批判にとどまらず広く社会全体の不正、人間の欲望の醜さを諷刺したものと解釈してもいいだろう。子規の怒りを覚えたという官吏の不正の具体的な内容は紹介されず、諷刺毒舌の歌作りそれ自体を楽しんでいるような子規の姿をここにみる事ができる。これらの歌は短歌というより狂歌というべきものだろうが、新聞にこのような歌が載ること、諷刺の笑いのうちに社会の不正を告発し、人倫や官僚の正しいあり方を求める意識を高めることになる。狂歌の役割は、「文学」を越えた一つの社会運動にあるとも言える。そ

れは諷刺のユーモアのうちに世を正そうとするのである。単に歌人というのではなく、新聞人でもあった子規らしい作歌と言えよう。

五 はがき歌

明治三十三年三月十一日「心の花」(第三卷第三)に「はがきの歌」と題し「竹の里人」の名のもとに二十六首が発表された。(以下、読みの便宜を考えて発表時の片仮名を平仮名表記に改めたが、片仮名で短歌を表記しているところに子規の遊び心もある)

三月十三日麓へ

①、十四日お昼すぎより歌をよみに上根岸迄おいで下され

同日秀眞へ

②、明日は君がいでます天気よくよろしきうたの出来る日であれ

三月廿八日秀眞は造れる土の子供を見せたるに

③、風呂敷の包みを解けば驚くまいか土の鑄型の人が出た出た

四月一日秀眞へ

④、へな土のへなの鑄型のへなへなに置物つくるその置物を

奈良茶飯のたき方を問ひけるにたき様書の奥に

⑤、青丹よし奈良の茶飯のたきやうを歌人とはす名をなつかしみ

四月四日鹿洲がはやり風にて病み臥しゐけるに

⑥、君が病ひかさにあらねば瘡守の佛のちからそれもすべなく

⑦、病みて臥す御足の下の鑄物師を憐みたまへ薬王菩薩

下谷区谷中やなか瘡守様事薬王菩薩殿棚子 山本鹿洲殿

四月廿五日秀眞へ七首

- ⑧、薄衾うすかさま堅きが上の床ずれのいたやいたやに選歌忘れいたり
- ⑨、足引の山本君は所知らず歌まはしおきぬ岡君のもとへ
- ⑩、青丹よし奈良の佛もうまけれど写生にますはあらじとぞ思う
- ⑪、天平のひだ鎌倉のひだにあらで写生のひだにもはらよるべし
- ⑫、飴売のひだは誠のひだならず誠のひだが美の多きひだ
- ⑬、人の衣に佛のひだをつけん事は竹に桜をつけらんが如し
- ⑭、第一に線の配合其次も亦其次も写生々々なり

八月二日秀眞へ

⑮、我家の家の宝を人とはば秀眞が鑄たる茶托五枚あり

十月十四日中村不折の住所を問ひやりたる芳雨へ

⑯、折れ曲り折れまがりたる路地の奥に折れずといへる絵師はすみけり

十一月五日麓が蜂屋柿といふを送りたるに

⑰、ひなにては祇園坊という都にて蜂屋ともいふ柿の王はこれ

⑱、あぢはひを何にたとへんかたちさへこきくれないの玉の如き柿

十一月十三日麓へいひやる

⑲、空晴れしけふの日和に家を見に午後より行かん香取氏もゆかん

十一月十六日秀眞へ

⑳、初冬の空晴れわたり風もなきあたたかき日を鑄物見に行かん

㉑、歌つくる鑄物師こころいものする歌よみこころほつまこのめやすし

十一月十七日秀眞へ

㉒、牛をさき葱ねぎを煮あつきもてなしを喜び居ると妻の君にいへ

㉓、我口を触れし器は湯をかけて灰すりつけてみがきたぶべし

㉔、正ちゃんを誰やらに似ると思ひしはラフェルがかきしマドンナの耶蘇ヤソ

十一月廿日麓へ

㉕、鹿の巻を見たまひたらば選み歌をはや送りたまへ君の歌も共に

同日安民へ

㉖、鹿の巻を選みし歌と君の歌と二枚に分けて書き送りたまへ

香取秀眞は東京美術学校に学んでいたが、「日本」新聞を創刊以来読んでおり、俳人としての子規を尊敬していた。しかし、「日本」新聞に「歌よみに与ふる書」や、その実作である「百中十首」が「竹の里人」の名のもとに発表されても、何者だろう、というくらいでその歌論にも、歌にもあまり感服しなかったという。明治三十二年、秀眞はたまたま新年雑詠三十二首を作り、岡麓、大橋文之、山本鹿洲らの友人と共に「三十二番歌合せ」なるものを試み、文之の発案で、歌の判定を子規に頼もうということになった。子規はその判定役を心よく引受け、短歌について親切に指導、助言をした。三月十四日、今度は子規の方から歌会をするから来ないか、という案内があった。

そこで岡麓、山本鹿州、香取秀真の三人が子規を訪れ、互選の結果、子規は秀真の歌のみを採った。秀真は大いに喜んだ。三人とも美術家であつて、岡麓は書家、香取秀真と山本鹿州、後に子規門となつた川崎安民は、いずれも鑄物家である。①②の歌は、子規の招待したこの最初の歌会の案内状である。四月十八日、再び歌会を開き、この月以降、毎月歌会を催すようになるが、これが「根岸短歌会」の始まりであつた。香取秀真のまとめたこれらのはがき歌は、その歌会の一端を伝えるものでもある。

子規はこれらのはがき歌について、次のように書いている。

「はがきの歌につきて何か御疑いでもあるやなれども、これは秀真氏が集めて秀真氏が寄稿せられたるに相違これない。このことにつきては同氏より小生へも相談ありし故、小生も承知の上のことに候ふ（中略）さりながら、その歌が出鱈目なるだけ、それだけ貫之、躬恒などの歌より、はるかにすぐれ候かと存じ候。古今集崇拜の人、これを読んで御氣絶をなされぬやう願ひ奉り候ふ」

これらの歌が貫之、躬恒の歌よりはるかにすぐれているなどというのはもちろん言いすぎで、自ら記すことく「出鱈目」歌で、ふざけた戯れの歌が大半である。歌として両者を比較して論ずるなどというのは意味のないことである。ここには、古今集的な類型的な美意識を茶化す、子規の反骨精神とユーモアがある。子規はこれらの歌の実作をもつて、型にはまつた、まじめな（まじめとは、既成の常識に捉われ硬直化しているという意味である）歌を破壊しようとしたといつていい。なるほど、これらの歌をみれば、古今集崇拜の人のみならず、誰でも一体これは何だ、これが歌なのかと驚くような作品である。子規とて本気でこれらの歌がすぐれているなどと思つてゐるのでなく、一種の権威に対するからみのような発言だと思われる。ユーモアをもつて権威主義のまじめさを撃つ—それが短歌の革新運動の一面であつたと言えよう。

それぞれの歌について簡単に解説してみよう。①②の歌は、前述したように（明治三十二年）三月十四日に歌会を開くという案内を歌としたもので、①は、十四日昼過ぎ歌会を催すから上根岸の子規庵までおいで下さい、と岡麓に案内したものの、②は、明日はあなたがいらっしゃる歌会の日だから、天気がよく、いい歌ができる日であるように祈っています、と香取秀真に伝えたもの。

付記しておけば、この三月十四日予定通り、前年三月以来、一年ぶりの歌会が催された。前年三月二十五日は子規庵で初めての歌会が開かれた日で、参会したのは子規、遠人（福田把栗）、碧梧桐、虚子、露月、秋水、墨人と俳人ばかりだった。「ほととぎす」十五号「東京都消息」欄に、「子規詞宗歌の研磨につき、三月二十五日和歌の運座を俳句以外に開くべしとなり、予等の俳句に成功したる力は、また和歌に於ても成功すべきを疑はず、諸君斬道（〓この道。ここでは短歌を指す）の為を思はば揮つてまたその団坐に交れ」と子規は檄を飛ばしたが俳人達は、短歌を作ることにあまり積極的でなかったのである。「歌よみに与ふる書」であげた烽の火も、それを実践する仲間を得られなかった。子規は、俳人達とは別に、あらたに短歌の弟子を求め、共に短歌革新の運動を展開してきたと考えていたと思われる。そのような折、秀真らが指導を求めて訪れたのは子規自身にとっても幸いなことだった。その上明治三十三年には伊藤左千夫、長塚節が子規門に参じ、根岸短歌会は隆盛期を迎えるのである。三月十四日、歌会に参加したのは、子規、香取秀真、山本鹿洲、木村芳雨、黒井恕堂の五人で、歌人参加の初めての歌会であった。当日の「みやびなる友うちよりて子規殿の家に歌よむけふぞ楽しき」（おそらく恕堂の歌）という歌にその日の雰囲気も偲ばれる。歌人とは言っても東京美術学校の美学生が中心となっていたから「彫刻又は鑄物」などという兼題（〓歌、俳句などの会で前もって出しておく題）もあり、子規は「あら土の鑄物くづせばあら尊佛の姿あらはれにけり」などと詠んでいる。

③は、三月二十八日秀真が訪れ鑄物の原型を見せたところ、子規は大いに喜び、その後「原型拝見何よりうれしく候ふ。ひだなどは、空論でこそ言へ實際にてはまだ分りかね候ふ」と記した後、この原型は実物体に作る事ができるのか。又原型に正面はあるのかなどと質問し、最後にこの歌を添えたものである。歌は君（秀真）の持参した風呂敷包みを開いてみたところ、驚いたことに土の鑄型の子供が出てきたというもので、読みながせば、歌とも気づかないから「これは歌に候ふ」と注を添えてあるのもおかしい。④は、同じこの粘土の鑄物の原型を戯れて詠んだもので、粘土のやわらかい鑄型の、そのへなへなの形の通りに、固い鑄物の置物を作る、その置物よ、と「へな」の言葉遊びをしている。歌の後に「こは出雲ぶなりハハハハハ」と添えているのは、「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作る その八重垣を」（古事記）をもじつたものだということを示したものである。同じこの四月一日の書簡に、別紙として奈良茶の作り方を書いた。おそらく子規庵を訪れたさい、話題になって、秀真が作り方を尋ねたのであろう。「米一升につき醤油一杯半又は二杯（酒飲猪口ニ）、味淋又は酒一杯（同）、番茶を煎じ出してそれを水にかへて米を焚く。大豆をいりてその皮を除けて米に入れて焚く。その皮を除けるには、いり豆を板の上に載せ升の底でゴロゴロと摩軋すればとれます」とあり、その後⑤の歌が添えられている。歌の内容は奈良茶飯の焚き方を、歌人（あなた）がお尋ねになる―奈良というそのゆかしい名をなつかしんで、というものである。⑥⑦には、歌会に参加した山本鹿洲が風邪をひいた、その見舞状の二首で、「竹乃里歌」には「谷中瘡守に居る鹿洲の病めるに」という詞書が添えられている。「瘡」とは、おでき、腫物の総称又、ばいどく 黴毒のことで江戸時代には売春が盛んに行われ、黴毒も流行していたというから、瘡守地蔵が信仰されたのであろう。⑥は、あなたの病氣は瘡でないから、瘡守や佛の力も役に立たないとたわむれたもの、⑦は、源実朝の「時によりすぐれば民の嘆きなり八大龍王雨やめ給へ」を踏まえたもので、病床に臥しているあなた様の足もとの鑄物師、鹿洲をどうぞ憐れんで、

病氣を治して下さい 薬王菩薩よ、とこれも戯れのユーモラスな歌である。「下谷区」うんぬんは、鹿洲の住所をもじって戯れたもので下谷区谷中の瘡守様、そして薬（病氣）をつかさどる菩薩殿、「棚子」は店子で借屋人という意味であろうか。深刻な病氣であればこのような戯れの歌は失礼とも言えようが、風邪である。病床の鹿洲は子規のユーモアに親しみを感じ、一笑したであろう。同時に又、病苦に喘ぐ子規の姿を逆に思いやったかもしれない。

⑧から⑭までは、いずれも秀真宛の歌で、文章はなく、通信的な内容をすべて歌でもって伝えたものである。⑧は堅い薄ぶとんに横たわつての病床で、床ずれができ、痛い痛いと泣いていたので、選歌もできなかったと詫びたもの、⑨は、山本君（鹿洲）の住所が不明なので、岡麓の所へ歌を送ったと知らせたもの、⑩は、奈良の仏も立派だが「奈良茶飯もうまいが」を掛けているのである。写生が何といっても一番だと歌作りに「写生」が大切なことを説いたもの、以下⑭まではすべて「写生」の重要性を述べている。即ち、⑩の、「ひだ」とは「技法」とでも考えればよいであろうか。秀真が鋳物師であることから、仏像の「ひだ」にかけて詠んだもので、天平や鎌倉の仏師の技法によらず、専ら写生の技法によるべきだ、という。⑫の「飴売」とは、「甘い優美さを尊ぶ歌人」ということでもあるか。見かけよりも真実が大切だ、真実こそ美であるというもので、歌論を歌にしたようなもの、⑬は、人の衣に佛のひだをつけるのは竹に桜をつけるようなもので、竹は竹の真実を描くべきだと述べたもの、⑭は、一にも二にも写生が大切だ、ということであろう。

⑮は、歌の前に「先日は御光来下され候ふ所、折柄来客あり、御話も出来ず、遺憾に存じ候ふ。いろいろ話の種類も積もり居り候。その節は種々御恵役に預かり有り難く候」という文章がある。「竹乃里歌」には「秀真自ら鋳たりといふ茶托五枚を贈り与へられしに」の詞書が添えられている。秀真の鋳た茶托をわが家の宝として大切にしている」と述べたもの、⑯は、木村芳雨（三郎）に宛てて「今度の歌合、次の課題は天象（天文現象）としようか」

と書いた後、根岸の地図をこの歌と共に添えてある。芳雨も鍔金家で子規門の歌人である。歌は中村不折の不折という名に掛けて幾度も折れ曲がった路地の奥に不折という画家が住んでいると不折の家を示したもの。不折は画家をめざして信州から上京、早くより子規に見出され「小日本」「日本」「ホトトギス」などに挿画を描いた。洋画家であり又書家。自宅は子規の家のすぐ近くで後、ここに書道博物館を創立、子規庵と共に保存されている。

⑰⑱は、十一月五日根岸短歌会が開かれた折、(子規、格堂、三子、安民、鹿洲、一雄、秀真、麓、碧梧桐、不可得の十人の参会) 麓は柿を持参した。その札状に添えたもので、これらの歌の前に「只今は失敬致し候ふ。御帰り後、御たまものを運び来り、見せ候ふところ、もはやがまんが緒がきれとうとう一ツねだり、とり申し候ふ。これは当地にて蜂屋と申し候やらん。我郷里にては祇園坊と申し候ふおよそ天下に柿多しといへどもこの柿にますは、これなき候ふところ、根岸にこれなきためついに口に入らず。郷を出でて二十年はじめて風味に接し申し候ふ。定めて御持参困難なりし事と存じ候ふ」とある。柿好きの子規の喜びの伝わってくる書簡であり、歌である。⑰は、田舎では祇園坊といい、都では蜂屋ともいう柿の王はこれだ、⑱は、そのうまさは何に喩えよう、形も濃い紅の美しい玉のような柿だ、といずれももらった柿を讃えたもの。⑲は、かねてから岡麓の新築の家に招かれていたので、思い立って十一月十三日、朝のうちに、午後から香取秀真に行くこと知らせたもので、形は歌だが内容は全く通信そのものである。根岸から麓の本郷区金助町まではさほどの距離ではないが、歩くことのできない子規はこの日、人力車に載せられて麓を訪れた。秀真にも「今日午後、岡氏の新築見に出かけ申さんかと存じ候ふ。貴兄も御出かけありてはいかが。但し、午後の事」と葉書を出したが秀真は同行しなかった。この日、麓秘蔵の書画を見せられ、夕食をもてなされ九時ごろに辞去。この日の出来事は「小石川まで」と題し「日本」新聞に発表(十二月二十五日)された。⑳㉑の歌は、その文中にも紹介されている。㉑の「こころ」とは数多いという意味だから、歌よみの鍔物

師も多い、又、鑄物する歌人も多いが、その中でも秀真は特に感じのいい人だと、秀真を讃えたものであろう。

②から④は、秀真の家を訪れた時の礼状であり、②は、おいしいごちそうを頂き、手厚いもてなしを受けたことに感謝していると君の妻にも言っただけでほしいという。③は、自分の病気が感染しないように注意してほしいということとを具体的に述べたもので、私の口を触れた食器は湯をかけて灰をすりつけてみがきなさって下さいという。子規ほどの病者、しかも結核、カリエスという伝染病の病者を慕ってその庵を訪れ、又こうして招く、そこには心温まる交流があるが、感染に無頓着だったわけではなく、こうした歌にすることによって、重い病いも、その予防策も一種の「軽み」のうちに表現されているといえよう。④の「正ちゃん」というのは、秀真の長男正彦のことで、ラフェルの描いた幼子イエス像に似ているというのである。

⑤は、回覧歌会稿の「鹿の巻」の選歌を早く送るようになり、その時君の歌も共に送ってほしいと麓に伝えたもの、⑥は、同じ「鹿の巻」の選歌に君の歌も添え、二枚に分けて書き送ってほしいと安民に伝えたもの。このころ、直接集参してその場で選をするのではなく、郵便回覧歌会の形で選をしていたが、⑤⑥の歌は、その歌会の形式を伝えるものでもある。

はがき歌はこれらの美術関係の歌人に対してだけでなく、他の歌人に対しても宛てられている。その中から根岸短歌会の歌人として最も重要な二人、即ち伊藤左千夫と長塚節をとりあげてみよう。左千夫が子規を訪れたのは明治三十三年一月二日のことで「日本」元日の新年雑詠に三首入門したことがきっかけであった。左千夫は前年「歌よみに与ふる書」が発表されて以来数度にわたって反論していたのだが、これ以後、子規庵での歌会に参加するようになった。香取秀真らへのはがき歌同様、左千夫に宛てたはがき歌もその歌会と結びついている。

明治三十三年三月二十三日の左千夫宛書簡は次の三首が記されていた。

① 豎川の茅場の庵に君着かば二十日の月の野を出でぬらん

② 我庵の硯の箱に忘れありし眼鏡取りに来歌よみがてら

③ 吾妹子をなほし見かほしと思へども眼鏡忘れて見れども見らえぬ

この前日、二十二日左千夫、秀真が子規庵を訪れ、夕食を共にし「春雨十首」を作ったが、歌はいずれもその時のことにかかわっている。①の「茅場」は左千夫の家が「本所茅場町」にあり、歌会を終えて家に着くころは、二十日の月が出たであろう、と遅くなって帰る左千夫のことを想像して詠んだもの。②は、二十二日の歌会の時、左千夫が眼鏡を忘れていったから、取りにくるようになり、その時ついでに歌も詠もうというもの。③は、君は妻のことをきれいだ、見たいと思っても眼鏡を忘れたので見ようとしても見ることができないだろう（だから取りに来い）と、左千夫に冗談をいってからかったものである。

明治三十三年四月六日の書簡は次の二首が添えられている。

① 夜にしなれば痛みこやる身の熱はあれど歌の手紙を二つ書きたり

② 歌会にこやるといひて笑はれて書きしこやるの解は正しも

この二首は四月一日、十二人の参加のもとに歌会が開かれた折、不可得の歌のことから「こやる」「こやす」という動詞が問題になったことをふまえて作られたものである。①は夜になったので「痛みこやり」身の熱は高くなつたが歌の手紙はがき歌二通を書いたことだと、話題になった「こやる」を詠み込んだもの。②は、歌会の時「こやる」という言葉を使って笑われた人もいるが、その「こやる」について書いた自分の解釈「こやる」は正しいだろうか、ということであろう。この二首の歌の前に「こやる」の事、はなはだ面白く候ふゆえ、新聞へ出さんと思ひしがなほ少し不審あり。友人に問ひ合はせ置き候ふゆえ、その返事を待ちて載せ申すべく候ふ」とある。「こや

す」という動詞については四月七日の竹村鍛宛の書簡中でも論じており、「こやす」という動詞」という文章が「日本」に発表になったのは四月十二日だった。

六月八日の左千夫宛書簡には次の二首が見える。

①今日や来ます明日や来ますと思ひつつ病の床に下待ちこがる

②十日は発句の会なり九日の朝から来ませ茶は買ひてあり

①の歌は、今日いらっしやるか、明日いらっしやるかと思ひながら病床にあつて心ひそかに待ちこがれていますと、左千夫の訪れを心待ちにする気持ちに詠んだもの、②は、六月十日は句会例会があるので九日の朝からお越し下さい、茶は買つてありますという。左千夫は搾乳業を営む一方、茶道のたしなみもあり「茶博士をいやしき人と牛飼をたふときなり業と知る時花咲く」という歌を子規は左千夫に贈っている。「牛飼が歌詠む時に世の中のあたらしき歌大いに興る」というよく知られた左千夫の歌は子規の薫陶があつたことが知られる。

さらに子規の左千夫宛書簡の中からはがき歌をとりあげてみよう。

① 豎川の流れ溢れて君が家の庭の木賊に水は越えずや

② 藁すきの紙にもあるか君が身は瀧見に行かず雨づつみする

③ さみだれの篠つく雨に傘さして華厳の瀧を見ざるを惜しむ

④ 落瀧津瀧のとどろき岩震ひ毛牒震ひて迂りて落ちそ

⑤ 痛都岐乃長伎病波癒根共年乃始登咲流梅鴨

⑥ いとし子のまな子のつつみひまあらば牡丹見に来と文書きおくる

⑦ 今日明日に君来まさずば我庭の牡丹の花散過むかも

⑧ 去年君がたひし牡丹も今日已につばみやぶれて紅の見ゆ

⑨ 足引の山のつとひに君来すば牛てふ影のうしやさびしや

⑩ 藤の歌山吹のうた歌又歌歌よみ人に我なりにけり

①の短歌は、明治三十三年七月十日の葉書に見えるもので、水害を見舞ったものである。歌は君の住む豎川の流れも溢れて君の家の庭の木賊を水は越えてしまったのではありませんか、という。

②から④の歌は、「日本」新聞の募集短歌課題の「瀧」作歌のため、長塚節と共に日光へ滝を見にいった左千夫が、その帰宅途中、子規を訪れた際の話を書いて歌にしたもので、「冷笑の歌六首の内」と詞書し、同じ詞書のもとに節にも三首送っている。子規の意識の中で、左千夫と節は兄弟的な弟子として並べて捉えられていたことを示すものでもある。②の歌は、あなたは藁ですいた破れやすい紙なのか、せっかく日光にまで行っていないながら瀧も見に行かず、雨に降りこめられたことだ、というのであろう。

③は、激しく降る五月雨に傘をさして華厳の滝を見に行かなかったのは残念なことだ、④は、落瀑の滝のとどろきに岩も震い、毛牘も震えて迂り落ちるところだったというのであろう。せっかく出かけたものの豪雨に降りこめられて華厳の滝を見ることができなかつた、それを冷かし笑いする、というのが「冷笑」の意味で、二人を残念でししたとからかっているのである。節に宛てたはがき歌は次の三首である。

さみたれの雨を恐れて二荒の滝見に行かぬ汝を笑ふ（さみだれを恐れて、せっかく日光まで行っていないながら華厳の滝を見に行けなかつた君をお気の毒様と笑っていますよ）

さみたれの水嵩ましたる瀧つ瀬に落ちて流るな山のいも泣かん（さみだれのために水嵩を増した滝に落ちてながされるなよ。恋人が泣くだらうから。「いも」は「芋」と「妹」の掛詞）

いかつちの音なす瀧をおそろしみ肝玉潰れ歌袋裂けん（雷のようにとどろく瀧が恐ろしかったので、肝つ玉も潰れ、詩囊も破れてとても滝などみられなかったのだろう）

⑤は、明治三十四年の左千夫宛年賀状に見えるもので万葉仮名で書いている。「いたつきの長き病はいえねども年の始とさける梅かも」と詠む。「痛都岐」は初案では「草都々美」と表記され、「竹乃里歌」では「草つつみ」と書いたが、それを抹消して「いたつきの」（＝病氣）とした。葉書を見ると「草都々美……」が斜めに三行にわたって筆で記されている。

⑥から⑧は、三十四年五月十三日左千夫に宛てたはがき歌五首中の三首で、このころ左千夫は幼児が病床にあり子規庵を訪れることができないでいた。そのことに関連する歌で⑥は、いとしい子の眼の病気がよくなったら牡丹を見にくると手紙をよこした（のに、まだ来られませんか）と来訪を促したものの、⑦は、今日、明日にもいらつしやらなければ庭の牡丹の花も散ってしまいますよ（早くおいで下さい）というもの、⑧は、去年あなたが下さった牡丹もすでに蕾がほころび、花の紅が見えていますよ（早くおいで下さい）というものである。⑨の「山のつとひ」は、「山会」と名づけられた写生文の研究会をさす。「足引の」は「山」にかかる枕詞で、「つとひ」は「集ひ」つまり集まり、会合である。「牛てふ影」は牛飼いであった左千夫を指し、「うしやさびしさ」の「うし」の序として洒落たもの。要するに山会にあなたが来ないと面白くない、寂しいと訴えたもの。⑩は、藤の花に続き、山吹の花の歌を詠み、歌又歌と詠み続け、自分は（俳人から）歌人になったことだと短歌への熱中ぶりを詠んだもの。藤の歌、山吹の歌は「墨汁一滴」のそれぞれ四月二十八日、三十日に発表されている。書簡の結びは「変なことし書く 規」と洒落、「左千夫兄」と宛てている。左千夫は明治元年（一八六四）生まれで子規より長ずること三才だった。

長塚節が子規庵を初めて訪れたのは明治三十三年三月二十七日のことだった。しかし門前に人力車があり来客中かと遠慮、又初訪問の気おくれもあつてそのまま帰った。翌二十八日、再び訪れ短歌の指導を乞い、短冊の揮毫を依頼した。以後、二人の、短い期間ではあつたが深い交流が始まる。節宛のはがき歌を拾いあげてみる。(三首はすでに紹介した)

①年の夜の鰯いわしのかしらさすといふたらの木の芽をゆててくひけり

②竹むらにかくれて生ふる山椒の芽のからくも君にこひわたるかも

③下総ふさの結城ゆうきの小田の田雀は友うしなひてさふしらに啼く

④下ふさのたかし来れりこれの子は蜂屋大柿我にくれし子

⑤しもふさの節はよき子これの子は虫くひ栗をあれにくれし子

⑥春ことにたらの木芽おくりくる結城ゆうきのたかしあれば忘れず

①②の歌は、三十三年四月二十一日の節宛書簡に見えるもので、たらの芽を送られたことに対する感謝を述べたものである。①は、大みそかに鰯の頭にさすというたらの木の芽をゆてて食べたと伝えたもの。②は、「竹むらにかくれて生ふる山椒の芽の」が「からくも(＝必死に)」を導く序になっている。たらの芽を贈られたことから、山椒の芽へと連想が働き恋歌めかして節への好意を示したものである。

③は、三十四年二月初、田雀を送られたことに対する礼状で「田雀とやらありがたく候ふ。をととひもたべ候ふ。きのふもたべ候ふ。今日もたべ候ふ」と記した後に添えた歌である。「下総の結城」とは節の住む所であり、下総の結城の畑の田雀は、(こうして殺されて送られたため)友を失って寂しそうに鳴いているであろうと、ユーモアをこめて歌ったもの。

④から⑥は、「竹乃里歌」拾遺中に「喜節見訪」の見出のもとに収められている。いずれも贈り物をされた御礼の歌である。④⑤の「これの子は」というのは「これがあの」という意味である。四月十三日の書簡には「一、木の芽 二、折 右たしかに受領かたじけなく存じ候ふ」とあるが歌は載せられていない。

歌としてとりたてていうほどの歌ではないにせよ、これらのはがき歌は面白い。それをもらった人はうれしく、面白く思っただろうし、現代においてこれを読む私達にも楽しい。それは戯れであり、師として尊敬される子規が自らを尊敬して集まってきた弟子達に、こんなユーモラスな親しみのこもった歌を出しているのが興味深い。人々との関係が気薄になり、手軽で簡単な電話で用を足し、手紙を書くことも少なくなり、その手紙もワープロだったり、決まり文句しかなかったりしがちな現代にあつて、いかにも人間的な親しみのこもったこれらのはがき歌は、書簡文化としても、又、短歌のありようとしても、私達に反省を促しているように思われる。近年、子規のはがき歌にならった作品を募集するコンテストなどが試みられているのは、子規の精神を生かし、歌を現代の生活に根づかせ、書簡文化を大切にしようとするものとしても意義深いものがあるといわねばならない。

短歌は何も文学として短歌雑誌に発表したり、何賞などという名譽の対象として存在しているのではなく、日常生活、人々との親しい交流の中から生まれるものだということを、これら、はがき歌を通して子規は私達に示している。そして、そのユーモアも正直、率直でありながら、心温まる人間的な交わりの中から生まれているのである。

参考文献

- 「子規全集」全二十二巻 講談社
- 「笑いと治療力」ノーマン・カズンズ 松田銃訳 岩波書店
- 「愚庵の生涯とその歌」大坪草二郎 古今書院（昭和十五年刊）